

## 観客の脳裏に焼きつく 役者としての存在感

### 『復讐するは我にあり』

1979年、140分

監督／今村昌平

原作／佐木隆三

主演／緒形拳、三國連太郎、小川真由美、

倍賞美津子

DVD／松竹



昨年10月5日に亡くなった緒形拳さんの追悼番組として、ほぼ30年ぶりにTVで再見した。

衝撃的なりアリズム映像である。世間を震撼させた連続殺人事件を題材にしている。開巻近く、緒形扮する榎津による理由のない殺人シーンで画面が血に染まるのを見て目をそむけた。だが逃避行が始まり、榎津と父親（三國連太郎）、榎津の妻（倍賞美津子）の近親憎悪、骨肉の愛憎の描写に入っていくと、見たくない現実であるにもかかわらず画面にぐいぐい引き込まれていく。今村昌平の演出と姫田真左久のカメラは、長年月を経てもあせずに力があふれている。人間を見る目が確かということだろう。

九州から浜松に逃げてきた榎津が、あいまい宿の女将（小川真由美）とねんごろになり、女の母親（清川虹子）には殺人前科があるとわかってきて、ここでも3人の奇妙な愛憎が浮き彫りになってくると、人間のもつ根源的な罪の恐ろしさに身震いしつつも、これらの負の人間描写のリアルさに圧倒される。あるいは「性」によって人間が変貌していくのを目の辺りに見て背筋に悪寒が走るのを感じながらも、まぎれもない生身の人間が描かれていると納得せずにはいられない思いになる。

人間の内面にもつ「悪」をえぐり出すのは、なまかな才能と努力では不可能である。今村は誰もが手をつけたことのない世界に突っ込んでいる。緒形も、悪徳と欲望をざらざらさせ、なおも生への執念を貫こうとする男の、業とも言えるものを、一切の情緒を排して演じきる。キリスト者の表と裏の二面性を鮮やかに刻む三國連太郎の演技とは対照的であり、2人が刑務所面会室で対決するラストは鬼気迫るものがある。

緒形拳について触れておこう。役者としての幅の広さ、善も悪も丸ごと演じきれるのが緒形であった。善悪で割りきるなどは出来ないのが人間ではあるものの、それでも原罪を背負った人間の存在を徹底して冷静に演じているのが本作品であるとしたら、その対極は、『砂の器』（野村芳太郎監督）における、満身善意の警察官役であったろう。生涯を村の駐在として献身しながらも、助けた男に殺されてしまう悲劇。その善性を人なつっこい笑顔と全身からにじみ出る温かさで演じてみせた。山田洋次時代劇の『隠し剣 鬼の爪』では「悪」を、『武士の一分』では「善」を、ほんの一つか二つのシーンでくっきりと演じ分けていたのも近年では印象に残る。

そして彼の死が報じられてから始まったTVドラマ『風のガーデン』では、明らかに病んでいるとわかる痩身で終末期医療に専念する田舎の老医師を演じていた。善も悪も超越した人間の穏和さが匂いたち、みずからの死期を悟った緒形自身の静かな覇気が感じられた。多く見た緒形のドラマの最後を飾るものとして、倉本聰のシナリオも練れてはいたが、聖化された人間像を形象化して見せてくれたという思いが残った。彼の肉体は消えたが、その役者としての存在感は、観客の脳裏にいつまでも焼きつくことになるに違いない。合掌。

本欄の担当は4年。追いかけて新作映画評を書く私にとって、作品の自由選択は嬉しかった。ありがとうございました。

#### プロフィール

吉村 英夫（よしむら ひでお）

1940年生まれ。映画評論家、愛知淑徳大学教授。早稲田大学卒業後、三重県立高等学校で教鞭を執る。34年の教員生活を経て退職、現在に至る。著書に『完全版男はつらいよの世界』『老いてこそわかる映画』などがある。近刊は『講義録・黒澤明を観る』。